

染香 ぜんこう

福泉寺寺報
令和7年4月
第132号
毎月1日発行

価値の基準

我が家の次女・妙(新二年生)が、小学校の修了式の日「あゆみ(成績表)」を持ち帰ってきました。色々あった一年でしたが、とにかくにも、一年間よく頑張ったことを親として喜びながら、また一人の人間としても敬意を表しながら(なにせ、片道3kmの道を歩き切ったのですから!)、ハグをもって労いました。いやがられつつ。

さて、我が家では「あゆみ」をもらった日は、子どもたちがそれぞれ、仏さまに供えて、ロウソク、線香を供えてから、後で親にも見せるという流れがあります。娘も同じようにしてから、私と一緒に中を開いて見ました。

三段階評価の「A」が七割、あとは「B」で、「C」はありませんでした。Cがなかったことに娘は満足だったようですが、少し気が晴れていないようにも見えました。

「どうした? すごく頑張ったじゃん」と労をたたえると、

「Bが少ないもん…」とションボリするので、私は思わず「面白い!」と膝を打ちました。彼女の中では「AよりもBの方が優れている」という認識だと思ったからです。その後、娘は「Aの方が良い」と丁寧に説明しました。

ホームページ



おてLINE



子ども行事



ありのままに、すなおに

しかしそれでも、娘の表情はそれほど晴れません。その理由が後日、明らかにになったのです。

始業式前、学校に行く用事があるというところ、娘も付いてきました。始業前の職員室に、担任の先生がおられ、娘のテンションはマックス。私は先日の出来事を笑い話に出しました。それを聞いて先生は「あっ!」という表情。どうしたのか訊くと、『あゆみ』を渡すときに、ウサギとカメの話をしました。そして『Aだからといって油断するなよウサギみたいに』『Bは追い越すチャンスだぞカメのように』と話したのです。と。

娘は、先生の話をよく聞いてきたのです。こんなに素直に聞けるなんて…これまた、ナカナカ出来ないことだと思ひ、再び膝打ち。

仏教の世界では「ありのままに聞く」「素直に受け入れる」ことが、何よりも大切です。例えばお経には「如是我聞(このように私は聞いた)」とか、「南無(仰せのままに、おまかせします)」のように。素直に聞いてたまされる社会では、なかなか通用しない考えかもしれません。娘を、まだ世間を知らないと侮るなかれ。大切なことを教わった気分です。(住職)

いまさら仏教!



そもそも【合掌】とは

仏事では必ず合掌します。これは仏教が誕生するずっとまえのインドの作法が取り入れられたそうです。

インドでは右手(清浄)でご飯を食べ、左手(不浄)でトイレをします。そこから、右手は(仏の世界)左手は(現世)を、また右が好き、左が嫌い、というように、相反する二つを見立てて、その二つが「調和」する(対立しない!)という意味合いで、合掌が成り立っているのだそうです。

相反する二つ…ほかに何があるでしょう? 例えば「役に立つ⇔無駄」「高価⇔安価」…そして、「私⇔あなた」…これらが、対立せずに調和します。墓前、仏前で合掌するとき、「対立と調和…」とイメージしてみてください。



ちょっと あたまの こりほぐし

どんな木にも

64 ついているものってなんだ?

★答えは裏面です



おてらより

西本願寺・比叡山へ参ろう

『第五十五回念仏奉仕団』

日時：六月十九日(木)～二十日(金)

★比叡山延暦寺は大改修工事中。普段はないようなご案内があります!

ピアノミニリサイタル

日時：六月二十八日(土) 十三時三〇分

★第2回となります♪

★今回はさらに素敵な選曲、それから、「素敵な楽器」も登場(の予感)。

施設訪問、出来る時に…

★縁あって、現在二か所の施設の入居しているご門徒さんのところに面会に伺っています。面会、と一口よりも、楽しくおしゃべりに行くような気分です。もしご希望があればおっしゃってください。大変ありがたいです。

東に病氣のこともあれば

行って看病して…

京都 正光寺 大八木 正雄

これは、宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の一節です。「雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケズ 丈夫ナカラダヲモチ 欲ハナク 決シテ瞋(いか)ラズ」で始まるこの詩は、多くの人々の共感を得てきました。賢治の生き方を象徴するこの詩の中で、特に注目すべき言葉として挙げられるのが、「行ッテ」です。「東ニ病氣ノコドモアレバ看病シテ…」でも意味は通じますが、賢治は「行ッテ」を入れることにこだわっていました。

「困っている人がいれば助けたい」という気持ちがあっても、実際に行動に移すかどうかには違いがあります。また、実際に行動するにしても、そこに損得・利害の心が少しでも混じっているのか、それともただ居ても立ってもいられず行動してしまうのかの違いがあるでしょう。賢治の思いは、後者の居ても立ってもいられないという気持ちであり、それが表れた言葉が「行ッテ」であると思うのです。それは、この詩の最後に「ミンナニデクノボートヨバレ

ホ(褒)メラレモセズ ク(苦)ニモサレズ サウイフモノニワタシハナリタイ」と綴られていくことから伺えます。周りから「デクノボー」と否定されても構わないという心境には、自分を肯定する心がありません。続く「ホ(褒)メラレモセズ ク(苦)ニモサレズ」には、自分の存在すら周囲が気づかなくとも構わないという、自我が消えた心境に近いものであったことが伺えます。そこから「行ッテ」という積極的な思いが湧いてくるのです。賢治の目指したのは、あたたかく、せつない仏さまの心でした。

さて、以前、ご門徒宅のお子様にせがまれて「坊主めぐり」をしたことがあります。百人一首の札をめくっていき、お姫様が出れば場にある札をもらえ、坊主が出れば持ち札を場に出し、最後に一番多く札を持つていた者が勝ちというルールです。お姫様が出れば嬉しく、坊主が出れば残念です。私は負けました。もし逆のルール、つまり手持ちの札が少ない者が勝ちということになれば、坊主の価値が上がるかもしれませぬ。私たちの世界では、勝つことは良いこととされています。

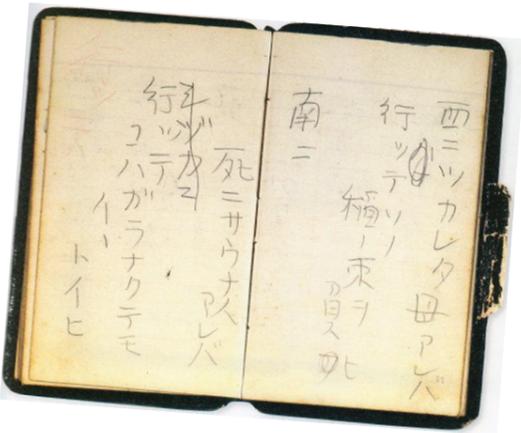
「雨ニモマケズ 風ニモマケズ」というフレー

ズは、そういう文脈で理解されてきたように思います。どんな苦境にあっても歯を食いしばって頑張る、勝ちを目指そうと…。私もそうなのですが、なぜ私たちは負けることが嫌いなのでしょうか。

賢治の「雨ニモマケズ 風ニモマケズ」は、勝つことを目指す言葉ではなかったのです。「マケズ」という言葉が含まれていますが、これは困っている人や苦しんでいる人に対する自分の姿勢を示す言葉でした。それは自我が消えた心、仏さまのような心への憧憬から生まれた言葉だったのです。

残念ながら、この言葉は戦時下の日本で国民の戦意高揚のために利用されたこともありました。私たち人間の浅はかさを痛感させられます。

(正光寺HP 住職閑話4月より転載)



【住職後記】

上の文章は私の声明(お経に音曲をつけたもの)の師匠です。先日、京都のご自坊にて稽古を終えたあと、近くの料理屋でいっぱいいただきました。その時、宮沢賢治の話になりました。

賢治の実家は浄土真宗で、父親は熱心な真宗門徒だったようです。教えに対して「熱心」だった父親に反発するように、賢治は法華(日蓮宗)の教えに傾倒していきました。

「人のために生きる」…。これこそが、賢治の生きる柱であり、多くの作品にその思いがちりばめられているのではないかと思います。

しかし、そのように思えば思うほど、実際はその通りではない。この「葛藤」が、『雨ニモマケズ』にあらわれているのではないかと、と師はおっしゃいました。

「人のために生きる」。これが「仏教の基本」です。それなくしては仏教を語れません。そして、そのことにどこまでもこだわった挙句に「ごめん、できない…」と仏さまに告白された親鸞聖人の『懺悔』と『葛藤』。

「法要など人前でお勤めすることがあっても、『懺悔』『葛藤』を忘れてのお勤めはありえない」と、教えていただきました。